

## 命のゆくえ

先進国のカップルが途上国の女性に代理出産を依頼する、いわゆる代理母ビジネスの記事を目にした。この商売がただちに不快なものとして映るのは、富む者が貧しい者の子宮を道具として利用しているからに他ならない。

かつて「命は授かりもの」であった。ところが、今日、バイオテクノロジーは、人為的にデザインして、新たな生命を作り出すことすら可能にしつつある。「命を好きなように作れる」世界では、命はどのような意味をもつのだろうか。

代理母が出産した子どもがダウン症だったとして、依頼した夫婦が子どもを引き取らなかったという話もある。命は誰のものだろうか、深く考えさせられる事態である。この話と不可分なのが、出生前診断と中絶である。生物医学的な欠陥をもつ命は選別しても良い、というこの思想は、つい最近まで優生保護法（1996年廃止）の名の下に実行され、重度の知的障がいと精神障がいなどを断種の対象としてきた歴史を持つ。翻って、亡くなっていく命に目を向けるならば、命の自己決定（あるいは家族の代行決定）を認める尊厳死、さらに安楽死は、命のもつ無条件の尊さ、神聖さを放棄しても良いと言うことなのだろうか。

授かる命を前にして、人はその力の限界を認め、恩寵を感じ取ってきた。だからこそ、思い通りにならないことや、予期せざる出来事を宿命として受け入れようとしてきた。はたしてバイオテクノロジーが進歩するなかで、驕り高ぶることなく、この自覚を見失わずにいられるだろうか。

ここに挙げた疑問は、キ医連の重要なテーマで有り続けるはずである。なぜならば、生命の現象は生物医学の対象であり、命の意味は哲学と宗教の問いであり、その両者を知ろうとするのがキ医連だからである。

### 付記：

この原稿を書いている最中に、熊本地震が起きました。お亡くなりになられた方々やご遺族の皆さまのことを思うと、心がとても痛みます。そして、被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。

（神庭 重信 第68回J CMA総会会長）

# 主題講演

## 生命のゆくえ

第68回JCMA総会会長 神庭 重信

### はじめに

生命（いのち）を操作する技術（バイオテクノロジー）が、人の生命の始まりと終わりに介入しようとしている。このこと自体の是非は、科学技術にその答えを求めることはできない。バイオテクノロジーをどう使い、どう使わないのかという問いは、倫理学・哲学の問題である。しかも、出生前診断、遺伝子操作、脳死臓器移植、延命装置…などの進歩に見るように、技術の進歩は、医師の職業倫理だけでは適切に対処できなくなっている。このような先端医療の基盤となる倫理を、「医療倫理」と呼ぶことが多い。

バイオテクノロジーの進歩と、その商業的な転用は、道徳律としばしば衝突する。道徳律のすべてが満たされない時に、何を優先するかを選ばざるを得ないことがある。ここに、キリスト者として医療に携わる私たちが、積極的に医療倫理を考える理由がある。

### 生まれていいのは誰か

先進国のカップルが途上国の女性に代理出産を依頼する、いわゆる代理母ビジネスについては、医福誌5・6月合併号巻頭言（第68回総会準備号）ですでに触れたことであるが、人身売買を目的とした「赤ちゃん工場」が貧困国で摘発されることもあるという。こうした、精子卵子の売買、代理母への金銭授与などにより、生まれてくる子どもが市場で交換可能な商品と見なされてしまい、人間の尊厳が貶められるおそれがある（文献1）。

生殖補助医療の技術進歩で、絨毛、羊水、あるいは母体血（NIPT）などを用いて、ダウン症などの先天性障害の有無を知ることができる（出生前診断）。また、体外受精により卵割が進んだ2～3日後の胚から1～2個の細胞を取り出して、染色体あるいは遺伝子を調べる着床前診断も可能となっている。着床前診断は、日本では限定的に行われているが、海外では男女の産み分けを目的として利用されたり、イギリスではなんと、病気の兄弟の治療のために、臍帯血移植や骨髄移植のためのドナーとすべく胚が選別され、「救世主兄弟」として育てられた

りしているという。

どのような子どもをもつか、子どもを持つためにどのような手段を用いるかを決める権利は女性とカップルにある、という主張を「リプロダクティブ・ライツ」と呼ぶ。一方で、出生前診断や着床前診断などの生殖補助医療は、障がいのある者の生きる権利と生命の尊重の否定、障がい者は不幸だという「健常者のエゴ」があるとして批判されている。

### 死んでいいのは誰か

次に、エンド・オブ・ライフにおいて、亡くなっていく生命に目を向けてみたい。ここには、生命の自己決定（あるいは家族の代行決定）を認める尊厳死の問題が横たわっている。すなわち、医療行為を終わりにして欲しいという、当事者たちの自己決定権は、どこまで許容されるべきなのかという問題が議論されている。生物学的生命を維持することが、人間の生命の意味や尊厳に反すると主張される時、では、いつまで生命を維持するか、いつ止めるか、すなわち生と死の境をめぐる具体的な判断が問われることになった（文献2）。

### 生命の被贈与性と尊厳

生まれてくる生命にしる、亡くなっていく生命にしても、生きるに値しない生命の存在を認めることは、すべての生命は同じ価値を持ってはいない、と主張することに他ならない。「授かる生命」、

「ゆだねる生命」を前にして、古来より人はその力の限界を認め、神の恩寵を感じ取ってきた。「生命の質」を比較考量するということは、生命のもつ無条件の尊さ、神聖さを否定することではないのか。

プロテスタント神学者ウィリアム・メイは、「予期せざる生命を受け入れる姿勢」を失えば、家族、そして社会という人類の共同生活は成り立たない、という（文献3）。倫理学者マイケル・J. サンドル氏は、「いのちは神から与えられる、という被贈与性が失われるならば、道徳の輪郭を作っている、謙虚、責任、連帯に変容がもたらされ、あるいは運平等主義がゆるぐならば、障害者や高齢者、貧困者を支援する福祉制度の成立基盤を掘り起こしてしまうかもしれない」と述べている（文献4）。

この、「生命は神から与えられる」という被贈与性ととともに、バイオテクノロジーによる人間改造を規制するのが、「人の尊厳」の存在である。キリスト教倫理では、人の尊厳を、人が神の似姿に造られ、イエス・キリストの死によって贖われた存在であるがゆえのものとして理解する。

ここで、牧師で神学者でもある、岡山孝太郎氏の言葉を引用したい（文献5）。「機能や能力をうしなっても、なお人間であるということこそ、また、そのあり得るがままで生きることが承認されねばならないということこそ、生命の原点である。『弱さこそ聖なるものである』という主張は、生命を包む優しさ、いたわ

り、思いやり、相互の理解と協力、連帯と共存を導き、これらこそが、人間として生きるために不可欠なものである」。

## おわりに

バイオテクノロジーの革新とその商業的な転用に対して、倫理、法律が追いつかない状況が生まれている。わたしたちは、バイオテクノロジーの進歩と共に、生命とはなにか、生命の質とはなにか、と止むことなく考えていくことになるだろう。

古来、「生命は授かりもの」であった。人は神により生かされて生き、御手のうちに死んでいった。しかし今や、人為的にデザインして生命を作り出す権利と、生命を放棄する自己決定権が議論されている。バイオテクノロジーは、今後も進歩し続けるに違いない。「生命を好きなように操れる」ようになった世界では、

生命はどのような意味をもつのだろうか。

ここに挙げた疑問には、単純な答えはない。しかし、キ医連が避けては通れない重要なテーマであり続けるはずである。なぜならば、生命現象は生物医学の対象であり、生命の意味や価値は宗教と哲学の問いであり、その両者を知ろうとするのがキ医連だからである。そして、生命とは何か、生命に違いはあるのかと懊悩する私たちに、神はつねに共におられる。

## 文献

1. 籍田求ほか、医療と生命、ナカニシヤ出版、2007
2. 浜口吉隆、キリスト教からみた生命と死の医療倫理、東信堂、2001
3. 島園進、いのちをつくってもいいですか？ p114にメイの言葉、NHK出版、2016
4. マイケル、J. サンドル、完全な人間をめざさなくても良い理由、ナカニシヤ出版、2010
5. 岡山孝太郎、生命の意味を問う、安平公夫監修、生命の意味、pp115~127、思文閣出版、1992



## 第68回キ医連総会を終えて

唐津で行われた第68回総会には、150人を上回る方に参加していただきました。心より感謝いたします。2014年10月22日を第1回として、20回におよぶ準備会と執行部会議などを重ね、準備を進めてきました。それでも、予定通りにプログラムが進行できずに、ご迷惑をおかけしたことも多々ありました。この紙面を借りてお詫びいたします。

キ医連総会では、聖書と賛美歌に包まれて、静謐な時が流れます。参加者がみな、クリスチャンであるという絆で結ばれているせいでしょうか、安心して時を共有することができます。その中で、多くの方の講話からは、聴く人それぞれに大切なことを、深く心に刻むことができます。加えて、どなたもが神の御心にそった生き方をされているからでしょう。すべての方との出会いが心地よく、その生きる姿勢からは多くのことを学ばせていただけます。

毎日多忙な生活をしていると、目前の予定や問題をこなすことだけで精一杯になりがちです。日曜にも用事が入ることが続き、ふとした時に、礼拝から足が遠のいていることに気づいて、情けない気持ちになります。そのような時に、新しい医福誌が届くと、それを手にしただけで、自分の信仰を確認することができます。そのようなわたしにとって、総会の3日間は、クリスチャンとしての1年を振り返り、次の1年へ向けた気持ちをしっかりと作り上げるための欠かせない機会です。

総会が終わり、大勢の方に「思い出に残る良い会でした」と言っていただくことができ、福岡・佐賀部会の一同は、苦労も疲労も癒えたように思います。一方で、来年の総会に向けて、柏木哲夫先生を会長とする大阪部会の準備が始まっていると思います。これからの遠き道のりの上に、主の恩寵がありますようにお祈りいたします。そしてまた、今年と同様に、大勢の方と大阪でお会いできることを心より楽しみにしています。

(神庭 重信 第68回JCMA総会会長)